

乳製品の需給状況について

雪印メグミルク株式会社 執行役員 酪農部長 小坂橋 正人

1. 酪農乳業の現況と課題

日本経済はアベノミクスの3本の矢により、消費者物価指数の上昇基調によるデフレ脱却の兆し、失業率や有効求人倍率の改善や企業業績の回復による賃金上昇等、緩やかな回復基調にあると言われている。しかし、酪農乳業界においては、極端な円安への移行や配合飼料価格を始めとする原材料価格の高騰、そして、TPP交渉や日豪EPAの大筋合意等、更なる経済連携の進展による先行きの経営不透明感から、酪農家戸数の減少に歯止めがかからず、昨年の6月より生乳生産量は前年を下回る状況が続いている。今年も、酪肉近代化基本方針の見直し議論が畜産部会でも行われており、酪農乳業共通の喫緊かつ重要課題である“生乳生産基盤の回復と強化”に向け、関係者による様々な議論・検討が実施されているが、本日は、こうした現況を踏まえ、直近の乳製品需給の状況と見通し等についてお話をいたします。

2. 国内需給動向

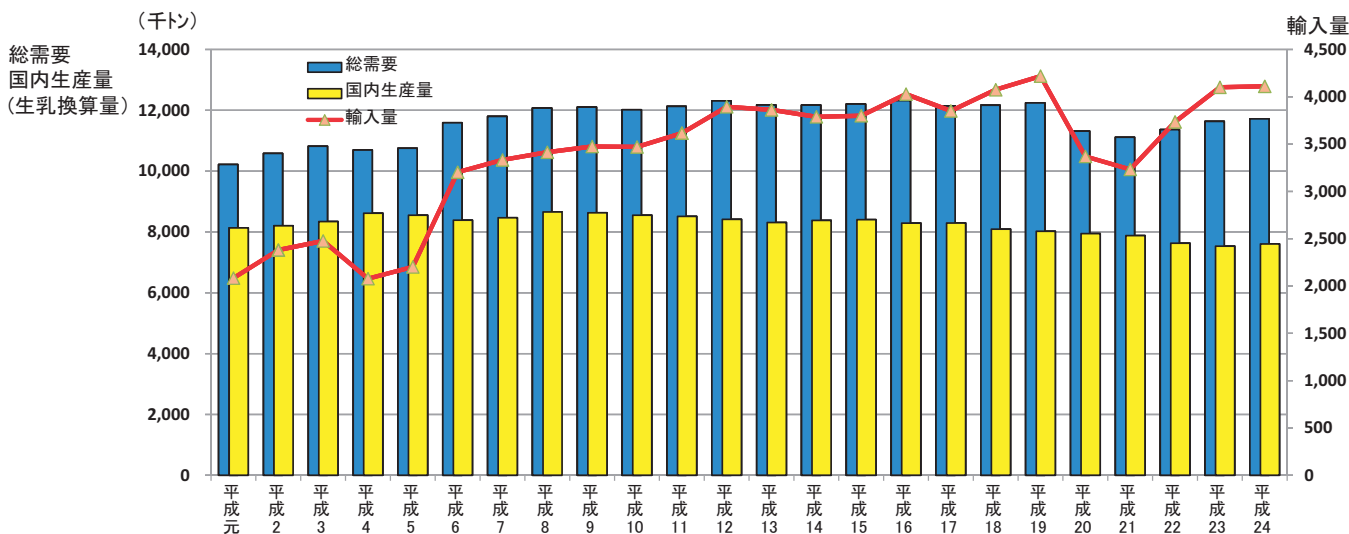
国内の牛乳乳製品総需要（生乳換算）は、伸び悩んでいる状況であるが、国内生乳生産量が減少基調にあるため、総需要に占める海外からの輸入量ウェイトが

高まっている。

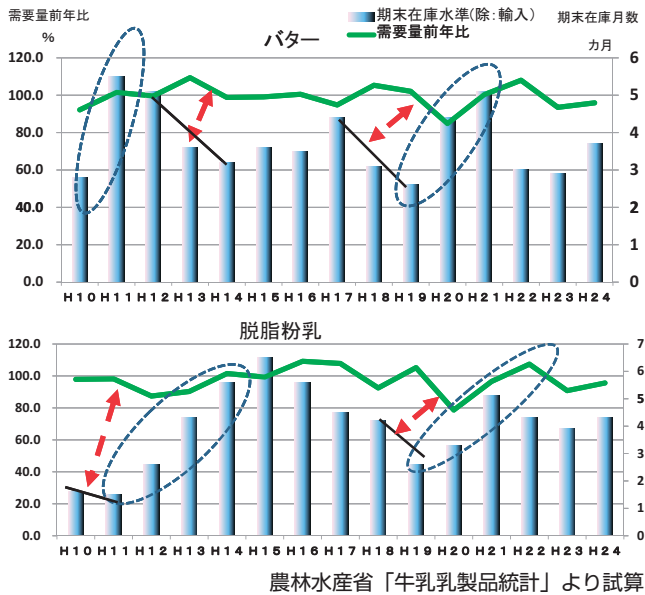
平成元年と24年を比較すると生乳量で約2百万トン、ウェイトで14%程上昇しており、TPP交渉等で食料の安全保障問題が問われる一因と見ることもできる。短期間でこれだけの量が輸入品に置き換わるとなれば大変な議論が沸き起こるところだが、長い期間で生じた増加は、結果として容認され、大きな問題として顕在化していない。

こうした構造変化の要因は、生乳生産の低迷や液状乳製品・チーズ消費の拡大を背景とし、国家貿易品目であるバターや脱脂粉乳の需給が過剰と逼迫を繰り返してきた影響も大きい。需給がタイトになると需要が海外品等へシフトし減少していることが次ページのグラフからも見て取れる。今年度は、その逼迫度合いが更に強く、カレントアクセス脱脂粉乳5,000トンの前倒輸入対応やバター7,000トンの追加輸入にもかかわらず、逼迫解消の兆しが見えず、直近のカレントアクセス品落札平均価格が脱脂粉乳768円/KG、バターで1,368円/KGと、国内の5月度大口需要者価格（脱脂粉乳：610円/KG、バター：1,183円/KG）を大きく上回るという、過去に無い異常な状態となっている。

市場の安定的な成長・拡大に向けては、品質、供給、価格、という3つの安定が重要とされているが、国家



農林水産省「食料需給表」



貿易品目でありながら供給と価格という2つの安定が崩れている状況であり、市場における信頼が損なわれている。

3. 国際需給動向

さて、海外に目を向けても、生乳換算貿易量は世界総生産量におけるわずか6～7%であり、かつ輸出余力のある地域(オセアニア、EU、アメリカ等)は限られている。中国を始めとする新興国の経済発展に伴う食料需要は旺盛であり、乳製品の国際価格も高値ゾー

ンに貼りついている。国家貿易品目として適時、適量、適品の輸入対応を国が試みても、リーズナブルな価格でタイムリーに調達することが厳しい状況にある。昨年11月に横浜で開催されたワールドデューリーサミットにおいて酪農経済政策に関するセッションの進行役を務めさせていただいたが、世界の人口増加や穀物需給、新興国の経済成長等を背景として国内外の有識者がそろって、国際需給は乱高下を繰り返しながらも不足に向かう可能性が高いことを示唆していた。EUのクォーター制廃止やフォンテラのアジア地域での生産参入、アメリカでの生産拡大への取組強化等、既に対応に向けた動きが始まっている。

文中のグラフを見ていただきたい。OECD-FAOの農業アウトルックでは、バターや脱脂粉乳の輸出货量増加分は既存の輸入国増加分で充足されてしまい、新たな輸入増に回る可能性が低い見通しとなっている。日本のバター国内需要約70千トン強、脱脂粉乳130千トン強であるが、仮に日本がこれに見合う量を海外から調達しようと思っても、調達できるか否かが不透明な状況にあることが理解できる。

4. 今後の対応

こうした国内外の現状と予測を踏まえても、中長期的な視点での生乳生産基盤の回復・強化という喫緊の課題解決、及び必要食料の安定確保という食料安全保障を考慮した、経済連携や規制改革、そして、酪肉近代化基本方針等の見直しに関する真摯な議論に基づく国の対応が如何に重要であり、現在の政策判断が将来世代に大きな影響を及ぼすことを、国に対して意見具申を行う立場にある酪農乳業関係者も強く認識しなければならない。

行政に対しては、特に、産業政策、地域政策の両面から乳資源の将来にわたっての安定確保に向け、実現性ある現実的な議論と定量目標の設定、そして実行を強く望みたい。また、足下においては業界全体の普及啓発活動により積み上げてきた財産でもある国内の牛乳・乳製品需要、特に国産品を望む市場の声が供給不安という不信感から吹き飛ばされ、海外品へシフトしないように、市場の声を反映させた対応を切に期待したい。スピードが鍵である。これらの対応が、腰を据えた生乳生産基盤の回復・強化への取組を下支えするものと確信する。

一方、酪農生産現場においては、関係者各位は知恵を出し合い、自助と共助の大切さを改めて認識し、地域の実情に合った創意工夫をこれまで以上に実行していかなければならない。今、ここで踏みとどまるという強い気概を持って、酪農と乳業が一体となって国民の期待に応えられるよう取り組んでいくことを誓い合いたい。

